

旋律の特徴について感じ取ったことを、グループで工夫しながら、歌唱表現を高めていく子ども

— 小学3年「旋律の感じをいかして『とどけようこのゆめを』を歌おう」の実践から —

1 題材のねらい

旋律の変化によって、音楽の雰囲気が変わることを感じ取り、曲想にふさわしい歌唱表現を工夫して歌うことができるようにする。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

子どもたちは、「春の小川を〇〇〇〇歌おう」の学習で、各グループでやさしい声で・楽しく・うつくしく・きれいに歌うことをめあてとして取り組み、旋律や歌詞に合った歌い方を工夫した。さらに、楽譜の2段目と4段目の旋律が同じ動きであることに気付いたり、3段目の旋律は他とは違った動きであるなど、旋律に関心をもって歌うことができた。次の文章は、やさしい声で歌うというめあてで活動したグループの子どものふりかえりである。

わたしは、春の小川をやさしく歌う歌い方を二つ見つけました。一つ目は、「おがわ」の「お」を口を開けて歌うことです。「お」は、「おがわ」の言葉の最初だから、「はーのおがわは」と少し強く歌う方がいいと思いました。二つ目は、「さらさら」のところをなめらかに歌うことです。理由は、強く歌ったらへんになるからです。友だちと歌っていると、友だちが「全体的にやさしく歌おうよ。」と言ったから、試してやさしく歌えたので、よかったです。(児童A)

児童Aは、グループで歌い方を工夫する活動の中で、歌詞の大切さに気づき、「おがわ」の出だしをはっきり歌ったり、歌詞の意味を意識したりして、優しい歌い方をするとよいことに気付いたことが分かる。また、強く歌うと曲の雰囲気や歌詞の意味に合わないことに気づき、歌詞にふさわしい歌い方を選ぶことができていた。この学習では、子どもが互いの演奏を聴き合ったことからよりよい演奏にしようと、繰り返し演奏したり、聴き合ったりすることで、どのように表現していけばよいかという思いや意図をもつことができた。さらに、同じ思いをもった友だちと一緒に歌い方を工夫していくことで、優しい声で歌いたいという思いに自信をもち、伸び伸びと表現したり、お互いの声を聴き合ったりすることを楽しむことができた。

音楽科では、表現及び鑑賞のすべての活動の中で、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みの働きが生み出す良さや楽しさを感じ取るとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりすることを大切にしている。このような学習を積み重ね、どの子どもも自分なりの思いをもち、歌う喜びを感じながらみんなで音楽をつくりあげる活動を通して、より豊かな表現を追求していく子どもを育てていきたい。

(2) 本題材の内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園音楽科では、特に「歌唱」の学習を通して、子どもたちが美しい表現を追い求め、全体の響きに調和させて、音楽を味わいながら、豊かに表現していく姿を目指している。この豊かな表現を求める活動の中で子どもたちは、自分の思いが表現できるように繰り返し歌ったり、友だちの表現の良さを見付けたりすることができるようになってきた。このことが思いや意図をもって、曲想にふさわしい表現を考えたり、自分や友だちの考えを生かしたりしながら表現することができる力を育てることにつながっていくと考える。

子どもたちは、これまで主に楽曲を聴きながら体を動かしたり、いろいろな楽曲を歌う活動

を楽しんだりしてきた。本題材では、これまでの経験を基盤にして、旋律の特徴によって強弱やバランスを考えながら、曲想にふさわしい歌唱表現をする姿を目指している。また、はずむ感じとなめらかな感じの旋律がある楽曲の鑑賞を通して、旋律の感じの違いは、音の長さやつながり方が関係していることに気付き、鑑賞で学んだことを表現に生かすことで、旋律の感じの違いにより歌い方を工夫する面白さに気付くことができると考える。

本題材では、学習指導要領の内容A表現（1）イ「歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。」及びB鑑賞（1）ア「曲想とその変化を感じ取って聴くこと。」を関連させながら学習を進めていく。

学習を展開するに当たっては、[共通事項]の旋律・変化に重点を置き、表現と鑑賞を関連付けて学習できるよう、鑑賞教材「馬にのって」（ブルグミュラー作曲）と歌唱教材「とどけようこのゆめを」（安西薫作詞/長谷部匡俊作曲）の二つの教材を選択した。

「馬にのって」は、音の跳躍のあるスタッカートで始まるはずむ感じの旋律と、三連符が続くなめらかな感じの旋律とが交互に出てきて、旋律の変化や特徴の違いが分かりやすい曲である。ピアノの生演奏を聴くことで、特徴のある旋律の一部分を聴き比べたり、弾き方を目で見たりすることで、曲想の変化を感じ取ることができる。また、聴くだけでなく、演奏を聴きながらはずむ感じとなめらかな感じを手拍子や身振りで表現することで、曲想の変化の面白さを感じ取ることができる。「『とどけようこのゆめを』の旋律はどんな感じかな。」と問いかけることで、旋律の感じの変化を感じ取る意欲を高めていく。

「とどけようこのゆめを」は、前半ははずむ感じの曲調で、「あさひが」「キラキラ」などの語感を生かして歌うことができる。後半は、伴奏が変化し、旋律もなめらかな感じの曲調となり、横に流れるような優しい意識をもって歌うことができる。さらに、リコーダーの副次的な旋律が重なることで、前半との変化を感じ取って、よりなめらかな感じで演奏することができる。グループや全体で、旋律の動きに合った歌い方を工夫していく活動を繰り返すことによって、子どもたちは音楽の雰囲気が変わることを感じ取り、曲想にふさわしい歌唱表現を主体的に工夫していく力が身に付くと考える。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

① 旋律の特徴を感じ取ることができるために

旋律の違いや特徴について感じ取ったことを、歌唱表現に生かしていくためには、旋律の違いを聴き取った特徴を話し合ったり、旋律の違いによる面白さを味わったりすることが大切である。

そこで、第1次では、旋律の特徴をとらえるために、鑑賞教材「馬にのって」（ブルグミュラー作曲）のピアノの生演奏を聴き、はずむ感じとなめらかな感じを感じ取る活動をする。[共通事項]の旋律・変化を視点とし、身体表現をしたり、はずむ感じとなめらかな感じの曲想を入れ替えて弾いた場合とを聴き比べたりして、曲想の変化による表現の工夫の面白さを感じ取る。鑑賞で感じ取ったことが、歌唱曲「とどけようこのゆめを」を聴いたときに「はずむ感じとなめらかな感じがある。」「自分で考えた工夫で歌いたい。」という思いにつながるようにしていく。

② 学び合いが深まるための場面の設定

子どもたちが、旋律の特徴を感じ取ったことを歌唱表現に結びつけていくためには、一人一人が自分の思いをもつことと、求める表現に向かって繰り返し歌える場を設定することが大切である。そこで、歌唱教材「とどけようこのゆめを」を聴いたり、歌ったりする活動を通して、曲想に合った表現の工夫をグループや全体で考えていく。グループ活動では、「元気に歌いた

い」「はずむ感じとなめらかな感じを変えて歌いたい」など、子どもたちはいろいろな思いをもつので、同じ思いの児童でグループを編成して、一人一人の思いを大切に表現の工夫ができるようにする。また、互いの考えが共有できるように、グループに一つ拡大楽譜を用意して、記号や言葉を記入させることで、歌い方を整理させていく。子どもたちは、歌っていると、どんな歌になっているか客観的に感じ取れないと予想されるので、演奏する側と聴く側から自分たちの演奏を聴き、聴き役の子がよさやアドバイスを伝えていくようにする。工夫する部分を教師が2小節から4小節に絞ることで、旋律の特徴を生かした表現の違いに気付くことができるようにしていく。見つけた歌い方の工夫や自分がどう歌っていきたいか記入できるワークシートを用意し、自己評価をしていく。

第4時の学び合いでは、前時に「とどけようこのゆめを」をグループで中間発表したことをもとに、自分たちのグループで工夫して練習し、もう一度グループ発表をすることで、旋律の特徴を生かした歌唱表現できるようにしていきたいと考える。そのために、他のグループの演奏のよさを聴く活動を設定し、友だちの演奏のよさを感じ取ったり、歌い方を試したりして、さらによりよい表現へと追求できるようにする。そこで、教師は提案するはたらきかけをしていく。子ども一人の表現を発表する場をつくってよさを見付けるようにしたり、一つのグループの表現をまねして歌うことで表現の仕方が広がるようにしたりしていく。このように個→全体→グループ→全体と聴いたり歌ったりする活動を繰り返しながら、一人一人が旋律の特徴によって歌唱表現を工夫する楽しさを味わい、友だちと旋律の特徴を楽しみながら歌うことができるようにしていく。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	「馬にのって」「とどけようこのゆめを」を聴き、はずむ感じとなめらかな感じの特徴を感じ取る	1	◇「馬にのって」のピアノの生演奏を聴き、感じの違い（はずむ・なめらか）について発表する。 ・身体表現をして聴いたり、曲想を入れ替えて弾いた場合と聴き比べたりして、感じの違いや変化の面白さに気付く。 ・「とどけようこのゆめを」の範唱を聴き、前半と後半の楽曲の違いに気付く。 ・どんな思いで歌いたいのか、自分の思いをもつ。
2	グループや全体で「とどけようこのゆめを」を旋律の特徴を感じながら演奏をしよう	2	・グループごとに、はずむ感じの「あさひがわらってる」の歌い方を考えながら、練習する。 ・グループごとの発表の前に、自分たちが工夫した点を伝える。 ・グループの発表を聴き、友だちの歌い方のよさを見付けていく。
		3	・グループごとに、なめらかな感じの「よびかけるかぜのうたくもにのって」の歌い方や、リコーダーで副次的な旋律の重ね方を考えながら演奏の仕方を工夫する。 ・グループの発表を聴き、友だちの演奏の仕方のよさを見付けていく。 ◇次の時間に、試してみたい他のグループの演奏の工夫を話し合う。
		4	◇友だちの歌い方のよさや、これまでの学習をもとに、グループや全体で旋律の特徴をいかした演奏の仕方をくりあげる。

4 授業の実際

① 「馬にのって」「とどけようこのゆめを」を聴き、旋律の特徴を感じ取る

本題材の導入は、ピアノの生演奏による「馬にのって」の鑑賞を行った。教師から「はずむ感じとなめらかな感じを見つけよう。」とめあてを提示し、子どもたちは楽曲を聴きながら手で旋律の違いを表すこととした。その際、教師が手本を示したので、子どもたちは旋律の違いに気付きながら聴くことができた。はずむ感じとなめらかな感じはどう違うか尋ねると、児童Bが「はずむ感じは音が消えて、なめらかな感じは音がつながっている。」と発言した。しかし、全員が理解できていなかったため、「本当に音が消えているのか目で確



かめよう。」と提案し、教師がピアノで演奏する指の様子を間近で見て、見付けることとした。すると、児童Cが「はずむ感じははねていて、なめらかな感じはずっと切らないでつなげている」と発言し、聴くだけより多くのことに気付くことができた。さらに、楽譜を提示し、音符の動きから、はずむ感じは8分休符があることや隣り合っている音が高低の関係であること、なめらかな感じは階段みたいの一つずつつながっていることを見付けることができた。

② 「とどけようこのゆめを」の旋律の特徴を感じながら、グループや全体で演奏をしよう

第2時からは、「とどけようこのゆめを」の歌い方をグループで工夫していく。子どもたちの歌への思いが、①元気よく大きな声で②美しく③きれいに④元気にスラーでという4つに分けられたので、同じ思いをもった子どもで集まってグループ練習をした。教師からめあてを『あさひがわらってる(はずむ感じ)』の歌い方を工夫しよう」と提示した。そして、音楽室の四隅をグループ活動の場とし、各グループに歌い方の工夫を記入できる拡大楽譜を用意した。この時間の表現力の伸びを聴き合うために、グループ発表と感想発表の場を設定した。どの班も、歌い方の工夫が見られた。例えば1班は、音の長さを「とめる」ことで休符を生かして歌った。2班は、楽しさを表現するために体をゆらして歌った。3班は、キラキラの歌詞から輝くように歌い、語感を生かして歌った。4班は1小節目ははずむ感じだが、2小節目は音が次の音へ順番に進行しているのでつなげて歌った。子どもたちは各グループの歌い方を聴いて、「もっと楽しく歌いたい。」「グループの人が思っていることがそろそろように工夫を考えたい。」「リコーダーと歌のバランスを考えたい。」という発言があり、「グループで気持ちをそろえてもっと楽しくきれいに歌いたい。」「バランスを意識していきたい。」という気持ちがわいてきた。自己評価表から、ほとんどの子どもが前時より自己評価が高くなっており、グループで同じ思いをもって練習していくことで、本時のめあてが達成され、満足感につながったと考える。



第3時では、めあてを『よびかける風のうた(なめらかな感じ)』の歌い方を工夫したグループの中間発表を聴いて、友だちの演奏のよいところを見つけよう」とした。子どもたちは、楽曲の後半のバランスをよりよくしたい気持ちがあったので、リコーダーの人数を調整したり、声の大きさに気を付けたりしながら練習した。さらにグループで発表して聴き合うことで、他のグループのよさに気付いた子どもがたくさんいた。気付きの内容をまとめると、「リズムに乗って歌うとはずむ感じが元気よくなること」「歌とリコーダーのバランスのよさがよい演奏につながること」「歌声や歌う表情のよさ」の3点であった。子どもたちにとって、今まではバランスが大きな工夫のポイントだったが、演奏を聴いたり見たりする中で、歌声や表情のよさが演奏をよりよくしていく要素になることにも気付くことができた。そして、大きな声は、美しく響く声だとさらによいということにも気づき、グループ発表を通して、お手本とした歌い方を発見することができた。ふりかえりでは、自分たちの演奏の練習の成果についても発言があった。発言の内容は、「前の時間よりはずむ感じとなめらかな感じを工夫して歌えた。」と旋律の特徴をつかんで歌えるようになった発言や、「なめらかな感じは音を伸ばすように歌って、うつくしく歌えてよかった。」と工夫したところを具体的に言えるようになった発言、「リコーダーを準備する場所を決めました。」という歌とリコーダーの息を合わせて演奏するコツの発言などがあった。自分たちのよさも認めながら、他のグループのよさを知ることで「次はもっときれいな声で歌いたい。」「次は、リコーダーをやさしく歌いたい。」など、今までにない課題意識をもち、追求して歌っていこうという気持ちが高まっていった。

第4時では、子どもたちは前時の友だちの演奏から取り入れていきたいことをもっており、

グループでさらに練習していきたいことを発表した。

- 1班…2班のリズム感。3班のスラー。4班の大きな声で元気に、バランスよく。
2班…1班のなめらかな時は弱く、はずむ時は大きな声で。3班の歌とリコーダーのバランス。4班の大きな声で楽しく、元気に歌う。
3班…2班の楽しく歌う。4班の女の子の声がとても大きく響いていたので、声を大きくして響かせる。
4班…1班のリズムに乗って歌うところ。2班のスタッカートとスラー。3班のリコーダーのやさしさ。

この後、めあてを「他の班の演奏のよさをまねして、もっとはずむ感じとなめらかな感じで演奏することを上手になろう」と提示した。子どもたちに、これらのポイントを取り入れて歌っていくと、どんな歌になるのかなと投げかけると、「すごい歌になる。」と上手になりたい期待と意欲が満ちた表情になった。以下は、1班のグループ練習での授業記録の抜粋である。

- T1 : 「どんなところに気を付けたらよくなったか教えて。」
児童D : 「今日、付け足したのは、キラキラのところと、ぼうをつけたのと、全体的に元気に。」
児童E : 「『よびかける』を止めて、『かぜのうた』を弱くです。」
T2 : 「2班、3班の試すところはやってみて、パワーアップした？」
児童F : 「さっきやってみたら、全部できたのでよかったです。」
T3 : 「じゃあ、聴かせてね。」
(演奏) あさひがわらってる～そらたかくかがやいて～きらきら(意識している)あざやかに
T4 : お互いに声を聴き合って、仲よく歌ってるね。声の大きさも大きくなったよ。1班は最後の「そら」を強く歌っているところがよさだね。楽譜に今日の工夫がいっぱい赤で書けたね。

このグループ練習では、他のグループのよさを試して歌うことで、さらに声量が増し、互いの声を聴き合って心と声をそろえて歌う姿が見られた。1班のよさは、互いに声を掛け合い助け合って歌う姿であり、それが表現にも現れ始めてきた。そこで、T1のように問い返すと、子どもたちは言葉で改善点を話すことができた。言葉で言うことで、子どもたち自身も歌い方をさらに理解することができた。なぜなら、グループ練習の際に分かり合った意識した歌い方だったり、言葉と歌が繋がったりしていたからである。演奏後にT4のように認めるはたらきかけをすることで、子どもは歌い方に自信をもち、全体発表への意欲につながっていくと考える。以下は1班のふりかえりである。

- はずむ感じは、大きな声で歌った。なめらかな感じは、きれいな声ではっきりと楽しい感じでのりのりで歌った。(児童D)
- ぼくは、リコーダーを担当しました。リコーダーはちょっと間違えたけど、いつもより上手にできてよかったです。歌の方は大きな声で特に歌えたのでよかったです。(児童E)
- はずむ感じは、リズムに乗って歌えたと、なめらかな感じはやさしい声で歌ったらなめらかな感じになりました。(児童F)
- なめらかなとはずむ感じのところをはっきり分けて、歌ったよ。なめらかな感じは心といっしょに歌ったよ。はずむ感じはやさしく歌ったよ。(児童G)

ふりかえりから、どの子も旋律の変化を感じて工夫して歌うことができたことが伝わる。また、グループの中で歌やリコーダーの役割を明確にし、何度も練習することで、納得する演奏ができていった。子どもたちは、自信をもって伸び伸び歌えたことが体感できており、グループのみんなと気持ちを合わせて楽しく歌えたことが分かる。

他のグループもグループ練習は3回目なので、聴き役への移行がスムーズになったり、アドバイスも「もっとバランスよくしようよ。」と言えたり、「何が足りないのかな?」「少しのばすのかな?」「よくなった。」と自分たちで歌い方をつくりあげたりする姿が見られた。

グループ発表では、どの班も話し合って得たポイントを伝えてから、歌うことができた。4つのグループの発表後に感想を聞くと、「今までで一番よかった。」「特徴がどのグループにも入っていた。」「一番大きな声で歌えた。」と前回に比べた成長を認める発言や、旋律の特徴を生かした歌い方になった発言、自信をもって歌えた発言があった。

最後にみんなで歌う場面では、一人の子どもの歌い方やあるグループの歌い方を全体に広げることで、歌い方を深める機会となり、心をそろえて歌い上げる表現へつながった。みんなで歌った感想を尋ねると、「最高の歌になった。」「上手に歌えた。」と満足そうな笑顔であふれていた。自己評価表に、書ききれないほどの○を書いたり、大きな○をたくさん書いたりした子

どもも多くいた。次の文章は、第4時のふりかえりである。

今日は、みんなで元気に歌えました。H君が聴き役の時に、「大きな声の人もいるけど、本気で歌ってない人もいる。」と言ってくれました。私は、本当のことを言ってくれてうれしかったです。理由は、直して欲しいところを言えれば、そこを直していくと、よい発表ができるからです。あともう1つうれしいことがありました。それは、みんなで決めた他の班のまねしたいポイントが全部できて、花丸だったことです。理由は、みんなで一つ一つのポイントができて花丸ということは、全部できて歌えるということだからです。(児童I)

児童Iのふりかえりからは、聴き役の子どものアドバイスにより、グループで練習してよりよい歌になっていく喜びを感じることができた。また、具体的に生かすポイントを画用紙に書いたことで、子どもたちが視覚的に工夫のポイントを共有できた。また工夫した歌い方ができたら花丸を（評価）していくサイクルを繰り返したことが、旋律の特徴をふまえて工夫して歌っている実感をもたせることにつながっている。次のようなふりかえりもあった。

昨日の音楽発表では、なめらかな感じとはずむ感じがよくできました。はずむ感じはスタッカートですごく元気に歌いました。なめらかな感じは、レガートで、つながっている感じに、スラーもつけました。わたしは、最初、こんなに元気とか、つながっている、スラーをあらわして歌うことができなかつたけど、わたしと同じ班の友だちがいろいろな歌い方で歌っていて、それをお手本にして歌いました。そうしたら、すごく元気に、つながっている感じやスラーが表せるようになりました。この班のみんなと歌えてよかったです。(児童J)

児童Jのふりかえりからは、最初は旋律の特徴を生かして歌うことができなかったのに、グループで練習したり、友だちの歌い方をお手本にしたり、いろいろな歌い方を試したりして、自分なりに旋律の特徴を生かして歌うことができた喜びを感じている。一人の思いも友だちの思いを重ねることで、自信をもって歌うことができた姿が伝わる。他の子どものふりかえりからは、「他の曲でもこの調子で歌いたい。」と今回の歌う楽しさや歌をつくっていく面白さを味わったことから、次の活動への意欲へつながっている姿も見られた。

5 成果と課題

本題材を通して子どもたちは、音楽的な感受をもとに、よりよい音楽表現を求める活動を繰り返すことで、はずむ感じとなめらかな感じの歌い方を見つけ、旋律の感じを生かして歌うことができるようになった。その要因として、次の3点が挙げられる。1点目は、聴く視点を旋律（はずむ感じとなめらかな感じ）に絞って、楽曲の全体を歌うことを通して、旋律の感じの違いを感じ取りながら、歌い方を見つけたことである。2点目は、歌への思いを同じくする子どもたちでグループをつくって練習したことで、子どもたちがよりよい歌づくりへ意欲をもって取り組めたことである。3点目は、個→グループ→個や個→グループ→全体→個などの演奏形態を繰り返すことで、自分や友だちの歌い方のよさや工夫に気付き、バランスや歌う表情、前半と後半を変化させて歌う面白さを子どもたち自身が見付けることができたことである。

また、学んだことをいかす場面では、グループによる歌唱練習において、教師は各グループを見てまわり、問い直したり、認めたりするはたらきかけを行うことで、子どもたちはグループの歌い方をつくりあげていった。グループ発表の場面では、他のグループの取り入れたよさを発表させることで、練習によって、自分たちの演奏がよりよくなったことに気付かせることができた。最後にみんなで歌う場面では、一人の子どもの歌い方や特定のグループの歌い方を全体に広げることで、歌い方を深める機会となり、心をそろえて歌いあげる表現へつながった。

グループ同士の学び合いは高まったが、一人の子どもの気付きや学びを全体へ広げる場は十分ではなかった。教師が子どもをとらえ、子どもの気付きを効果的に全体へ広めていくことで、歌唱表現の高まりが見られるような題材構成について考えていくことが課題であるといえる。

(文責 神門 洋子)